

# 歳末昏時/修正会

## ▼ 歳末行事

### ▼ 御煤払

御門主および御連枝殿ご出仕なされ、本堂、常楽堂、六角堂の御本尊や本堂祖師前御代前を御首払（棒状毛箒大小二本）、御身払（羽箒）をもって細部まで御払遊ばされる。終わって、御本尊の上に単の絹、その上に絹綿をかけ、更にその上を渋紙にて覆う。後、御本尊を本堂御休息所に奉移、金屏風にて囲い一時仮奉安。

次に、仏師参仕、蓮華台等一一全部取り外し後堂に移し、後刻清掃して元の如く組み立てる。終わって、御本尊を御休息所より内陣に奉移、元の如く宮殿御台座の上に安じ奉る。次いで、宮殿に紙帳をかける。

「紙帳」というものは本堂の宮殿須弥壇、大師堂の厨子須弥壇、全体を覆う和紙で作った蚊帳と同型の覆いで、天井があって底のない、巨大な紙袋を伏せたようなもので、正面のみ巻き上げるようにできている。

翌日、晨朝は紙帳の前側正面のみ掲之、勤行する。晨朝過より、愈々内外陣の総掃除にとりかかる。高处の欄間は梯子に上って煤払、内陣の御畳及竪畳は、全部取り除いて御局に積み重ねておき掃き掃除や拭き掃除をすることになっている。

（しかし、現今の御煤払は、上記様相とは異なっている。まず、御煤払は両門様及び御連枝殿ご出仕の上、御執行なされることになっている。また、御本尊についても移動させず、両門様御連枝殿が御払い遊ばされた後、絹綿をかけるにとどまっている。また、絹綿をかけた状態で掃除の上、紙帳は用いず、その日のうちに元の状態に戻すことになっている。）

### ▼ 歳末昏時

十二月三十一日、大晦日の午後四時、本堂でなされる勤行。修正会の荘厳一切を終わり、両門様始め御一門御連枝方、堂衆、在京堂班等、総員出仕にて勤まることになっている。

差定は、

正信偈 舌々

念仏讃 南無阿弥陀仏の回向の 次第六首 洵五三 反し念仏なし

回向 願以此功德 洵二

この様な正信偈、念仏讃、回向と、洵の不相応な勤行は珍しく、一年の中でこの歳末勤行に限られている。

## ▼ 修正会

### ▼ 修正会

修正会は年初に修する法要でありまして、我国仏教界に其の起源を求めれば、遠く聖武天皇の神護慶雲二年（768年）に初めて行われたと伝えられて居るのでありますが、我が浄土真宗にあっては、何時の頃から修せらるゝようになったかは、不明であります。『本願寺作法之次第』（『蓮如上人行実』）には

正月の修正七ヶ日、彼岸七ヶ日、本尊の御前の蠟燭の、とぼされ候事、証如の御代より始候。云々。（行実四七九）

正月初一七日の修正の時、代々の御影ことごとく懸候時、御鏡参に、みなみな御前に卓をかれず、かなかけ（折敷）に御鏡すはるに、前住の御まへも同様に候を、此近年前住の御まへには、卓ををかれ候事、古へ見及申さず候。云々。（行実四八〇）

とあれば、証如上人より以前蓮師の時代すでに行われ居ったものとみえます。それ以前も恐らく勤められて居ったのしょうけれども、確かとした記録が見いだせないのであります。現時、本山にありては、元旦より七日まで之を修せらるゝも、別院、末寺にありては、之を略して五日間又は三日間修することになって居ます。

また、修正会の荘厳で一際目を引くのが御鏡餅である。さて、この餅の起源を仏教儀礼からかかえると、まず修正会そのものは先にも述べたが、聖武天皇の神護慶雲二年（768年）に初めて行われたと伝えられて居る。その性格は吉祥天に向かって懺悔する吉祥悔過である。7日間にわたり、晨朝、日中、日没、初夜、半夜、後夜の法要が行われ、国家安隠、万民豊楽、寺門興隆の祈願を祈願するものであった。

それ以前にも、文献的には『続日本紀』天平宝字三年（759年）に「正月の悔過」とあり、性格を同じにする。また『今昔物語集』巻12には、元旦から七日までの宮中の正神事が行われたので、その「後七日御修法」として昼は『金光明最勝王経』が講ぜられ、夜に吉祥悔過が行われていたという。「悔過」とは人間の罪障を懺悔する修法であり、新年にあたって悔過法を行い天下太平、風雨順時、五穀成熟などを祈念したのであった。

修正会と並んで修二会も仏教行事として有名であるが、この2つは、旧1月に前年の収穫を感謝するものとして修正会を修し、旧2月に農耕を開始する時期の予祝行事として修二会が修され、一体の行事である。修正会、修二会ともにその農耕との関係から、餅が備えられるのである。

もちろん、真宗には人間の罪障を懺悔したり、五穀豊穡を祈念する修法や儀礼はない。したがって御鏡餅自体にもこうした意味は付与されていない。しかし、古来、日本人が大事にしてきた伝統や思いを排斥するのではなくて、むしろそうした伝統を通じて自身の生への驚きとありがたさを感じ、ひいては如来の御心に与って、法会として聞法の機縁と捉え直し、大事にしてきたのである。

## ▼ 御献杯

本山にては元旦は、本堂晨朝に先立って、御献杯の行事がある。御献杯とは、本堂三尊に向って、両門様及び御連枝殿が親しく「屠蘇」の盃を献ぜられる儀式である。

この御献杯式は、往時は絶対に他見を許されず、閉め切って行われたのであるが、近年は一般の者も自由に厳儀を拝見できることになっている。